

出会いの言語行動における多様性の形式的分類

長谷川頼子

キーワード：出会いの言語行動、発話連鎖の型、形式的分類、順序性

1. 本稿の目的

人と人が出会い、対面的コミュニケーションを開始する際には、何らかの操作的判断を通じて、あいさつを中心とする具体的な発話が交換される。特に、出会いのあいさつは、言語形式が字義通りの意味をほとんど持たない一方、形式・行動の型が社会習慣化し、様式化した儀礼的行為であり、高い定型性・くり返し性を持つ言語行動である。しかし、日常の言語生活における出会いは、つねにあいさつ語の交換だけで成立するとは限らない。例えば、出会った相手や状況によっては、あいさつ語と直接判断しがたい発話が起ったり、時には既知の相手でもあいさつせずすれ違うことがあるだろう。それに対し、従来のあいさつ研究では、その対象を決まり言葉からなる閉じた体系として限定的に扱う傾向が強いように思われる。これは、あいさつ研究が基本的に「あいさつするとき、どのような言語行動をするか」という関心を持つことに関係するといえる¹。本稿ではこれとは異なる立場をとり、「出会ったときにどうするか、どのような言語行動をするか」に重点をおく。後者の考え方に立てば、さまざまな出会いがあり、その中であいさつ語を交換することは、厳密には出会いの言語行動²の結果の一つとなる。あいさつの言語学的研究においては、こうした関心はそれほど大きくないように思われる。

本稿では、まず先行研究におけるあいさつの言語形式の定義を検討する。次に出会いの言語行動の多様性を示し、それをどう把握できるかを考察する。方法として、観察記録の分析を通じ、出会いの言語行動の形式的分類を行い、発話における構成上の特徴を中心に考察する。

1. 先行研究—あいさつの定義と問題点

現代日本語における出会いのあいさつ研究では、あいさつは通常「対面的コミュニケーションの開始時に交わす、儀礼的な言語行動」と規定される。しかし、これだけでは言語

学的に何をあいさつとするかというごく基本的な認定基準が厳密化されず、研究によって扱う対象に違いが生じる可能性もある。それに対して小林(1982)では、出会いのあいさつの定義において、表現形式から、分析可能なカテゴリーとして次の2種類を区別し、形式的把握を試みている。

1. 定型 (formula) [ex. おす、おはよう、こんにちは、こんばんは、…]

一種の符帳的合図、または極端な省略表現で、意味の上からはいわゆる「非命題的」な表現である。主として社会関係の確認、交信導通の機能を果たす。

2. 準定型 (grooming talk) [ex. お早いですね、お精が出ますね、お出かけですか…]

「命題的」な表現で、型通りとはいえ社会関係の円滑化に役立つ意味内容を一応備えている。相互の結束を強く関係を安定維持する機能を果たす。

この区別によって、小林(1982)は出会いのあいさつについて、主としてドラマの会話文をデータに、多様なあいさつの発話の型を分類した。特に、形式的区別を立てて、準定型に幅の広い発話を認めたり、また出会いのあいさつが決まり言葉のあいさつ語の交換に限らないと示したことは大きい。

しかし問題点として、定型・準定型を表現の命題性の有無という曖昧な判断基準で区別している。とりわけ、定型が「一種の符帳的合図、または極端な省略表現」という言語形式上の特徴を持つのに、準定型の言語学的基準は不明確である。また準定型には「お早いですね」や「お精が出ますね」の例が挙げられているが、本稿で扱う大学生のような若い年代層にはなじまない表現で、代表的な特徴がわかりにくい¹⁾。さらに、定型と準定型の関係が示されないので、この区別が何を意味するかが分からない。確かに、あいさつ語の多くは実質的意味を持たず、社会関係の確認や維持という、コミュニケーション上の機能を明らかに持っている。しかし、定義を社会的機能に基づいて外延的に行うだけでは、言語形式上の基準が明確にならず、言語学的研究においては定義全体が不透明になり、結果的には研究対象とする言語行動の範囲が定まらなくなってしまう。そこで本稿では、ひとまずあいさつの定義の問題には深入りせず、まず出会いの言語行動を全体的に把握するために、実際の表現形式の分類を行う。

2. 出会いの場面における言語行動

本稿では、出会いを「2人以上の参加者によって、偶然か意図的に関わらず、知り合

いや関係のある相手の存在にどちらか一方または両者が気づき、何らかの行動を図ろうとすることによって生じる場面」と考えている。これに関して、Laver(1974)⁴は「あいさつを中心とする発話の交換は、互いの役割を定義し構築しようとする機能を持ち」、それは「これから行われる相互行為での双方の役割がはっきりしていないために、一時的方法で相手の社会的アイデンティティや現在の状況を探る機会を得る」ことで可能になるとした。そして、言語外の動作学・近接学的要素を含めた複数の伝達行動からなる開始面(opening phase)での典型的な連鎖を、表1の8つの段階(stage)に分けて示した。

- I 相互に視線を合わせ、出会いを導こうとする相手への反応を示す
- II 遠くから手、腕、頭をわずかに動かして、あいさつの身ぶりや反応を示す
- III 相互の予測された関係に基づき、どのような表現やどういう注目をするか想定する
- IV 十分な接近につとめる
- V 相互の関係に適した身ぶりや、あいさつの慣習的接触を交換する
- VI 相互の関係に適した姿勢で向きを定める
- VII ステレオタイプ化された言語表現を交換する
- VIII 相互作用の主要用件の開始を言語的・非言語的のマーカ―によって相互に暗示する

表1：出会いの場面の行動の8つの段階(Laver(1974)による)

ここでは、ことばや動作などの表象的な現象だけでなく、複数の伝達のチャンネルから出会いの相互行為を一続きの連鎖でとらえ、その成り立ちを過程的指標として示しており、言語行動が複数の構成要素と場面的条件によって実現するという、言語行動生成過程のモデルを前提とした分析の観点から見ても注目に値する⁵。表1によれば、出会いの場面における言語行動は、段階IIIで言語形式の選択操作が行われ、段階Vであいさつの交換が行われ、さらに段階VIIでステレオタイプの言語表現が交換された後、段階VIIIで会話の主要用件に移ると仮定される。ただし、Laver(1974)自身が言及するように、この「連鎖」という概念は分析上の便宜が考慮されていて、必ずしも各段階が順番に起こるわけではなく、段階同士の重複や分断も十分ありうる。

これをふまえ、本稿では分析の観点として次の3点を設ける。まず、段階Vで仮定される、会話開始時の第1発話(話し手(S1))の言語表現をみる。第二に、第2発話(聞き手(H2))によって構成される発話連鎖を分析する。第三に、段階VIIに仮定されるステレオタイプの言語表現について、発話連鎖後の第3発話(話し手(S3))の言語表現を分析する。分析に用いるデータは実際の出会いを扱うので、従来の枠組みに相当しない様々な言語表

現が見れると予想される。本稿では、特にその多様性に着目していきながら分析する。

3. データ分析

3.1 調査概要

調査は次の概要で、大学生を対象に出会いの場面における発話のやりとりを記録した。

記録項目：出会った時刻・人数や性別・偶然か待ち合わせかの別(明らかな場合)

言語表現(話し手・聞き手による発話連鎖(相当分))・非言語行動

調査日時・場所：1997年7月7～14日・東洋大学自由校舎構内ラウンジ⁶(待合所)

分析データ数：136例(1つの発話連鎖(隣接ペア)相当分以上)

3.2 分類項目

分析にあたり、小林(1982)を参考に表2のとおり分類項目を立てた。

あいさつ語(A)	おはよう・こんにちは・うっす・おっす・ちわ・よう
実質的発話(B)	お久しぶり(です)・お待たせ(しました)・暑い(です)ね 何してるの?・どうしたの?.....
呼称(C)	～さん・～くん・～ちゃん・(あだ名)・先輩・先生
間投詞(D)	ああ・おー・あら・まあ
動作のみ(E)	言語行動が行われない場合で、手を振る・おじぎ・会釈など 非言語行動の中でも明示的な儀礼的行動が認められる場合

表2：データの分類項目

まず、呼称(C)や間投詞(D)は、小林(1982)が挙げた分析項目に倣っている。

次に、あいさつの表現を含む具体的な言語表現については、小林(1982)の定型・準定型の枠組みは用いず、まずいわゆるあいさつの決まり言葉として「おはよう・こんにちは」とその変種⁷から成る言語形式をあいさつ語(A)とする。これは、小林(1982)では定型に相当する。そして、あいさつ語(A)・呼称(C)・間投詞(D)にあてはまらない残りの発話全てを、より実質的な意味内容を持つ表現として、実質的発話(B)とする。この実質的発話(B)は、小林(1982)の「準定型」と厳密には同一でないが、重複する部分がある。

また、多くの発話は非言語行動を伴うが、中には非言語行動(手を振る等)だけを行う例がしばしば見られた。そこで、本稿では発話がない時に限り、手を振る・おじぎ・会釈など、明示的な儀礼的非言語行動を、動作のみ(E)として認定する⁸。本稿の分析では、発

話者を「話し手」「聞き手」と呼ぶが、便宜上動作のみ(E)についても発話者が「ゼロ(ϕ)」の発話を選択したもの」と解釈し、「話し手」「聞き手」が動作のみ(E)を行う」のような表現を用いる。得られたデータは以下のように項目別にコーディングし、複数の言語形式が結合した発話は、(間投詞+呼称)のように認定した。

例：ジュースを買おうとした女子1名(S)が、売場の前で友人男子1名(H)を見かけて声をかけた(no.13)⁹

S1:おっすー →(あいさつ語)

H2:あー、おっす、気がつかなかった→(間投詞・あいさつ語・実質的発話の結合形)

この場合、発話連鎖の型は[あいさつ語(A)－(間投詞(D)+あいさつ語(A)+実質的発話(B))]のように認定する。

3.3 分析結果

3.3.1 第1発話の言語表現

出会いの場面において、相互行為の開始にあたり話し手がどのような言語表現を用いたかについて、その種類と度数を表3に示した。

分類項目	結合形の内訳(度数)	度数	割合%
あいさつ語(A)		31	22.8
実質的発話(B)		15	11.0
呼称(C) ¹⁰	呼称 (19)		
	呼称+あいさつ語 (3)	26	19.1
	呼称+実質的発話 (4)		
間投詞(D)	間投詞 (12)		
	間投詞+あいさつ語 (2)		
	間投詞+呼称 (9)	28	20.6
	間投詞+実質的発話 (5)		
動作のみ(E)		36	26.5
	合計	136	100.0

表3：第1発話の種類

このデータから分かるのは次のようなことである。

あいさつ語(A)による発話(31例)は、呼称(C)や間投詞(D)に結合した形式を併せても、36例(26.5%)で、実際の会話の開始はむしろあいさつ語以外の発話が多いようである。

実質的発話(B)は結合形を含めると24例(17.6%)で、その言語表現の内容に着目する

と、表4のとおりに大別された。これを見ると、実質的発話といっても、話し手が単に自由な発話を行っているわけではないことがわかる。

表現内容(括弧内は度数)	データ例
・約束に遅れたことへの謝罪(8)	「ごめんね」「もうしわけないっす」
・相手の存在の発見や確認(4)	「いたー！」「きたきた」
・その他の個別的な発話(12)	笑い(2)・質問(3)・その他個別的な発話(7)

表4：実質的発話の言語表現

表4の謝罪や相手の存在の発見・確認という発話内容は、相互行為の目的に直接関係しないという特徴をもつ。すなわち、これらの発話は出会ったこと、例えば約束の時間に遅れたり、相手が来たという事態に対する言及であり、具体的な話題や用件とは区別される。また、全体的に短い表現が多く、省略のない述語文の形を持つ言語表現は見られなかった。

呼称(C)や間投詞(D)は、単独でも発話になる(「あー！」(no.54)・「まりこ」(no.107))一方、他項目との結合形(「あー、りえさーん！」(no.2))もあり、特に間投詞(D)に多く見られた(16例)。これらの発話は相手への呼びかけや、出会ったことに対する驚きの反応を示す特徴をもつと考えられる。ここで、結合形に着目すると、その結合の仕方は、単に話し手の任意ではなく、一定の方向性が見られる。表3によると、まずあいさつ語(A)・実質的発話(B)は他項目が後に結合しない。一方、呼称(C)・間投詞(D)では他項目との結合形を自由に作ることができるようだ。ただし、間投詞(D)+呼称(C)の結合形(「あー、りえさーん！」)は存在するが、逆に呼称(C)+間投詞(D)(「りえさーん、あー！」)という発話はきわめて不自然に感じられるように、実例でも全く見られなかった。このことから、ある項目を発話構造のより前の方に置くことについては、ある種の制約があると思われる。すなわち各項目の結合に対する順序性の観点から、項目間の関係を記述できると思われる。

動作のみ(E)も26.5%(36例)見られ、非言語行動によるコミュニケーションの開始は例外的とは言えない。以上から、第1発話の特徴は次のようにまとめられる。

- 1)発話の種類
 - 1)-1 あいさつ語による定型的なあいさつの発話
 - 1)-2 出会ったことに対する短い発話(謝罪や相手の存在の発見・確認)
 - 1)-3 出会ったことに対する反応的な発話(呼称・間投詞とその結合形)
 - 1)-4 発話のない、明示的なあいさつの動作
- 2)結合形における項目の順序性

3.3.2 発話連鎖の型について

第2の観点として、話し手と聞き手によって形成される発話連鎖をみる。そこで、聞き手の発話にも項目別分類を行い、発話連鎖の型と度数の分布を表5に示した。表の縦軸は話し手の、横軸は聞き手の発話を表し、数値は話し手の発話のそれぞれの言語表現に対する聞き手の言語表現を度数で示している。なお表5では、第1発話が結合形の場合、発話末の項目で分類してある。例えば第1発話のあいさつ語(A)には、[呼称(C)+あいさつ語(A)]や[間投詞(D)+あいさつ語(A)]の結合形を加えた36例を含めた。

話し手 (第1発話)	聞き手(第2発話)						合計
	あいさつ語	実質的発話	呼称	間投詞	動作	なし	
あいさつ語	16	4	0	8	7	1	36
実質的発話	1	12	0	4	5	2	24
呼称	2	3	3	15	4	1	26
間投詞	5	0	0	6	1	0	12
動作	11	2	2	7	13	1	36

表5：話し手から聞き手への発話連鎖の型の分布

連鎖の型から見て特徴的だったのは、[あいさつ語(A)→あいさつ語(A)(16例)]、[実質的発話(B)→実質的発話(B)(12例)]、[動作(E)→あいさつ語(A)(11例)]、[呼称(C)→間投詞(D)(15例)]、[動作(E)→動作(E)(13例)]の5つであった。ここに、観察時の記録を参考に加えてみると、5つの型は相互の出会い方に関係してとらえられる。

- 1) あいさつ語(A)→あいさつ語(A) 例：「おっす」→「おはよう」(no.44)
→相互に気づき、あいさつ語で発話を交換する
- 2) 実質的発話(B)→実質的発話(B) 例：「ごめん」→「いいよ、いいよ」(no.118)
→話し手が謝罪や質問など、実質的な発話を行い、聞き手がそれに応答する
(謝罪の発話は全て待ち合わせによる意図的な出会いに見られた)
- 3) 呼称(C)→間投詞(D) 例：「かなこ」→「あー！」(no.83)
→呼称で呼ばれて聞き手は話し手に気づき、驚いて間投詞を発する
- 4) 動作(E)→あいさつ語(A) 例：(手を振る)→「おはよう」(no.120)
→話し手が動作だけを行い、聞き手はそれに気づきあいさつ語で応答する
- 5) 動作(E)→動作(E) 例：(手を振る)→(手を挙げる)(no.46)
→離れた距離から相互に気づき、動作だけでやりとりし、近づいていく
または、動作だけでやりとりした後そのまますれ違う
(この場合、話し手または聞き手に連れの人物がいた)

つまり、言語行動における発話連鎖は、どのように相手と出会うかという、出会いの時点に発生する相互作用をも反映すると考えられる。すなわち、相手の存在に気づいているのは話し手だけか、または相互か、さらに気づいた時の相互の距離や、連れの人の有無など、言語に直接関与しない状況が、実際には言語行動の型に深く関わり、そのあり方を多様にしているのである。

出会いの発話連鎖におけるもう一つの特徴に、合図符牒性がある。これは、発話がおうむ返しされるもので、「おはようーおはよう」とか「やあーやあ」等の場合を指す。例えば、あいさつ語(A)ーあいさつ語(A)(16例)では13例が完全なおうむ返しで発話連鎖が形成されていた。他に、間投詞(D)ー間投詞(D)(6例)でもおうむ返しが見られ、呼称(C)同士でも発話連鎖を形成できるが、実質的発話(B)では、第1発話に謝罪や質問などの表現形式が見られたこともあり、おうむ返しの発話連鎖は見られなかった。その理由として、出会いの場面における合図符牒性は、語形が極端に省略され意味を失うなど、言語行動の型そのものが高度に慣習化・儀礼化したことの現れであり、慣習化の程度が相対的に低い、より具体的な内容を持つ表現に対しては、特定の型が存在しないためと考えられる。

3.3.3 第3発話(発話連鎖後の話し手の発話)について

第3の観点として、発話連鎖後の、第3発話(話し手)の言語表現を見る。観察調査では、136例中40例について、発話連鎖後の話し手の発話を記録した。表6では発話の種類を示し、表7は、表6で多く見られた実質的発話(B)を、内容から類別したものである。

分類項目	度数
あいさつ語(A)	9
実質的発話(B)	31
呼称(C)	0
間投詞(D)	0
動作のみ(E)	0
合計	40

表6：第3発話の種類

表現内容	データ例(括弧内は文脈の補足)
定型的表现(5)	あっちー(暑い)・おそろいで・久しぶり
返答(5)	うん/ううん(聞き手の質問への応答)
質問(9)	今日電話した?・何で授業に出てないの? 今日、携帯入ってきた?・何で焼けた?(日焼け)
謝罪(3)	ごめん・ごめんね・申し訳ない
その他(9)	試験がんばれ・(試験)終わったねー・ (試験勉強してきました)・今日テストだよ

表7：第3発話の実質的発話の言語表現(左括弧内は度数)

まず、第3発話があいさつ語(A)である発話(9例)は、第1発話(話し手)が呼称(C)・

間投詞(D)・動作(E)のいずれかであった場合で、第1発話にあいさつ語(A)や実質的発話(B)が用いられた場合には見られない。第1～3発話の連鎖の実例を挙げると、次の(1)～(4)では、(1)(2)および(3)(4)の○のついた第3発話は可能だが、(3)(4)の×のついた第3発話は連鎖としてありえない例である。

(1) (no.81)	(2) (no.69)	(3) (no.117)	(4) (no.97)
S1:としえ	S1:あれー	S1:おはよう	S1:ごめん、遅れたよ
H2:おー	H2:あー!	H2:おはよう	H2:いいよ、いいよ
○ S3:おはよ	○ S3:おはよ!	× S3:おはよう	× S3:おはよう
		○ S3:試験がんばれ	○ S3:もうしわけないっす

一方、対照的に多く現れたのが実質的発話(B)(31例)である。表7を見ると、謝罪や「久しぶり」などの定型的表現、聞き手の発話に対する返答、質問、その他の個別的な発話など、第1発話の実質的発話よりも表現内容は多様化しているものの、表現形式から類別化が可能である。また内容から見ても、質問およびその他の表現では、いずれも期末試験に関連した身の回りの話題で共通している。さらに、第1発話に比べると、述語文の形を持つやや長い発話も見られた。

呼称(C)・間投詞(D)・動作(E)は、第3発話では全く見られず、第1発話で呼称が26例(19.1%)、間投詞が28例(20.6%)見られたのと対照的な結果である。3.3.1で述べたように、呼称(C)や間投詞(D)は出会ったことへの反応的発話であるため、一度でも何らかの発話をした話し手は、出会ったことという事態に対する発話を用いることができないと考えられる。以上をまとめると、発話連鎖後の話し手の発話は、次に分類できる。

- 1)あいさつ語(A)(最初の発話と呼称(C)・間投詞(D)・動作(E)の場合に限る)
- 2)実質的発話(B)
 - 2)-1「久しぶり」などの定型的表現
 - 2)-2 約束に遅れたことに対する謝罪表現
 - 2)-3 質問や身の回りの話題などやや長い実質的発話
 - 2)-4 聞き手の発話に対する応答(肯定/否定)表現

4. 考察

4.1 出会いの言語行動の多様性

以上の分析から、出会いの場面における相互行為では、各々の状況に応じて、きわめて多様なことばや動作のやりとりが示された。本稿では、調査の性質上、厳密な出会いの開

始時、第3発話以降の発話連鎖、話し手と聞き手の関係や、より詳細な状況などは十分把握できなかったが、規範的な結果が出やすいアンケート調査と異なり、実際の出会いに現れ得る幅の広い言語行動は概観できたと思われる。そこで以下では、分析の結果を用いて、さらに出会いの言語行動の形成における順序性について考察する。

分析に用いた分類項目(あいさつ語(A)・実質的発話(B)・呼称(C)・間投詞(D)・動作のみ(E))は、出会いの場面の全ての発話を分類するために設定したものであるが、発話構造から見た分析を通じて、各々の項目間には順序に基づく関係性が認められることが分かった。この点について、発話がどのような構造をもつか(4.2)、また第3発話以降の構造について(4.3)、順序性による制約の観点から考察する。

4.2発話構造上における順序性

3.3.1で述べたとおり、呼称(C)はあいさつ語(A)・実質的発話(B)と、間投詞(D)は呼称(C)・あいさつ語(A)・実質的発話(B)と結合形を形成するが、逆の順序では形成されない。つまり、出会いにおける発話においては、構造上の順序として [①間投詞(D)→②呼称(C)→③あいさつ語(A)→④実質的発話(B)] という方向性が存在し、それにそって発話上に並べられなければならないという制約があるという仮説が立てられる。これに基づく発話構造は以下のように示される。

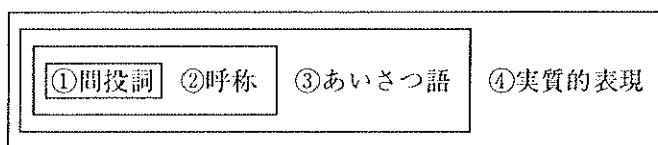


図1：順序性からみた発話構造

図1に挙げた①～④の項目は、それぞれ単独で発話になることができる一方、他の項目と結合して発話を形成する場合、[①→②→③→④]という方向性に基づいて項目間を結合しなければならない。そして、この制約の範囲であれば発話者は任意に特定の項目を結合できる。つまり、①+②や①+③、あるいは②+④という結合形は可能だが、順序性の違反を含む②+①や③+①+②のような結合形は不可能な発話となる。この構造を見ると、[①間投詞]や[②呼称]など、コミュニケーションにおける相手との接触を指向する機能を担う言語表現は、より発話の冒頭に置かれ、一方で、より実質的な意味内容を持つ[④実質的発話]は、発話の最も末尾に置かれる傾向にあることが示される。このことは、第2

発話(聞き手)の構造にも同様にあてはまる。また、[①問投詞]や[②呼称]などの相手との接触を指向する言語表現が省略されても発話が成立するのは、[③あいさつ語]、すなわちあいさつ言葉には本来相手との接触を指向する機能があることによる。しかし、実際には[③あいさつ語]すら現れずに、第1発話は[④実質的発話]でも成立する(15例)。そこで、多様な表現が可能な[④実質的発話]がなぜ第1発話となり得るのか、そのどこに接触を指向した機能が認められるかについて、今後用例を増やしながらか考察を深めたい。

4.3 第3発話以降における順序性

4.2で述べた発話構造上の順序性は、話し手がさらに次の発話を形成する場合にも適用できる部分がある。3.3.3では、第2発話(聞き手)を受けて話し手が第3発話を形成する際に、第1発話(話し手)の発話構造によって、第3発話を形成できる項目が制限されることを示した。これは、第1発話が[①問投詞]か[②呼称]の場合には、第3発話に[③あいさつ語]を用いることができるが、第1発話が[③あいさつ語]や[④実質的発話]の場合には[③あいさつ語]は用いられないというものである。結合形については、表5の分類と同様に、発話末の項目によって分類している。さらに第3発話では、[①問投詞]や[②呼称]は、どちらも用いられていなかった。

この現象は、4.2.1の発話構造と同様に、項目の順序性に基づく制約という仮説を立てることによって説明できる。すなわち、第3発話は、順序性から見て、第1発話の項目よりも順序が下がった項目だけを用いることができ、第1発話の項目に重複するものや、順序が優先される項目は用いることができない。これを示したのが図2である。

<第1発話>		<第3発話の候補>	
①問投詞	→	②呼称 and/or	③あいさつ語 and/or ④実質的発話
②呼称	→	③あいさつ語 and/or	④実質的発話
③あいさつ語	→	④実質的発話	
④実質的発話	→	④実質的発話	

図2：第3発話の候補に対する制約

具体的には、発話は相互に交換されるに従って、次第に順序性が下がった項目で形成されるようになり、最終的には[④実質的発話]のような、具体的な話題に移行していくものと考えられる。第3発話でも、第1発話の発話構造と同様に、出会った状況や、話し手の

任意によって、制約の範囲内であれば特定の項目を省略することができる。

発話連鎖の形成における順序制の制約は、第3発話以降においても機能されると推測される。すなわち、それ以降の発話の形成についても、この制約によって、次にどの構造を持つ発話が現れうるか、つまり発話の候補をある程度まで限定的に記述することが可能になる。さらにこの順序性は、第2発話(聞き手)の第4発話以降に対する制約としても同様にあてはまる。

ところで、第1発話が[①問投詞]の場合、第3発話は、図2の順序性から見れば[②呼称]・[③あいさつ語]・[④実質的発話]のいずれかおよび結合形になるが、データでは第3発話に[②呼称]は見られなかった。[①問投詞]と[②呼称]では、[①問投詞]が優先される制約があり、仮説では第1発話が[①問投詞]であれば、[②呼称]が第3発話になりうるはずである。これについては、今後より多くのデータにあたる必要がある。

また、第3発話は直前の第2発話に当然影響を受けるが、本稿ではその点には触れない。これは、出会いの言語行動の場合、おうむ返しの発話交換や呼びかけに対する応答など、第1発話と第2発話の連鎖に特徴的な型が見られる反面、第2発話と第3発話の関係が、現在のところあまりはっきりしないためである。これを分析するにはデータが十分とは言えないことから、この点については今後考察していきたい。

5. まとめと課題

本稿では、出会いの場面における言語行動について、対象をあいさつに限定せずに考察することを第1の目的とした。そこで、出会いの言語行動における言語表現や行動の型の多様性を、実際の出会いをデータとして特徴的なタイプに整理した。その結果、いわゆるあいさつ言葉だけでなく、問投詞や呼称などの呼びかけの発話や、出会ったことへの反動的発話が数多く見られることや、あいさつ語以外の実質的発話でも会話が開始されることを示した。特に、発話連鎖の型が非常に多様な分布を示したという意味では、本稿で提示した Laver(1974)の8つの段階も、出会いの一つのあり方に過ぎないのである。第2に、分析結果をふまえて発話構造における順序性を指摘した。この順序性に基づく制約により、出会いの言語行動の発話構造は形成されており、さらに第1発話以降の展開についても、順序性の観点から、次にどの構造を持つ発話が見れるかはある程度まで予測可能であることを示した。今後はデータの不備を補強する資料を収集し、考察で課題に残した点につい

て改めて取り組みたいと考えている。

¹このような考え方は、研究対象をしばしば「あいさつ言葉」とする扱い方にも端的に表れていると言える。

²本稿では、立場を明確にするため「出会いの言語行動」という語を用いるが、これは出会いにおける、あいさつを含めた可能な言語行動の全体を指すものである。

³若年層ならば、この場合例えば「早いね」とか「がんばってるね」などの表現を好むと思われる。ただしこれを単に年代層による文体差と考えてよいのかは別に検討が必要であろう。

⁴引用は筆者訳による。

⁵本稿では、言語行動の基本的な考え方の多くを南(1974、79)やネウストブニー(1979)などに負っている。

⁶調査場所は、待ち合わせの他、知り合いがいないか学生が頻繁に出入りする場所で、70人程が座れるソファがある。昼休みには、学生同士の出会いが頻繁に見られ、そこへ張り込む形で観察記録を行った。

⁷ここでは、「おはよ」「ちわ」「ちゃっす」など、「おはよう」「こんにちは」に復元可能な発話表現を変種と扱う。また、主として男子が用いる「よう・おう・おっす・うっす」等の発話表現もこの項目に含めた。ただし「おっ!」「あっ!」等は間投詞として区別した。なお、調査時間の関係上「こんばんは」はデータに含まれていない。

⁸非言語行動は、表1では段階ⅡやⅤに現れるが、実際の出会いは状況がデータ毎に異なり、判定は微妙である。観察調査の場合、相互の距離がある程度縮まらないと出会いを確認できず、段階Ⅱのような「遠くから身ぶりや反応を示す」様子の記録は難しい。そこで、話し手の非言語行動に対して聞き手の発話が起これ、それに対して話し手の発話が起これた場合について、話し手の第1発話を「動作のみ(E)」として認定することにする。

⁹これ以降用いるカッコ内数字はデータの通し番号を示している。

¹⁰呼称はすべて女子の発話だったことから、使用には男女差があると考えられる。

参考文献

- 沖久雄(1985)「あいさつ言語行動分析の観点」日本語学 4-8 明治書院、pp.31-42.
- 国立国語研究所(1984)「言語行動における日独比較」報告 80 三省堂
- 小林祐子(1982)「日本人とアメリカ人の挨拶行動～出会いの挨拶～」『東京女子大学付属比較文化研究所紀要 第42巻』pp.87-110.
- 鈴木孝夫(1981)「「あいさつ」とは何か」『ことばシリーズ 14 あいさつと言葉』文化庁 pp.34-46
- 東山安子、ローラ・フォード(1982)「あいさつにおける言語行動と非言語行動の日米比較」言語臨時増刊号、大修館書店、pp.82-100.
- ネウストブニー,J.V.(1979)「言語行動のモデル」講座言語第3巻「言語と行動」大修館書店
- 南不二男(1974)「現代日本語の構造」大修館書店
- 南不二男(1979)「言語行動研究の問題点」講座言語第3巻「言語と行動」大修館書店
- Aijmar,K.(1996) Conversational Routines in English: convention and creativity.Longman.
- Coulmas,F. ed.(1981)Conversational Routine : explanations in standardized communications and prepatterned speech. The Hague:Mouton, pp.289-304.
- Kendon,A. & (1973) A Description of Some Human Greetings. In Micheal and Crook (eds.) Comparative Ecology and

Behaviour of Primates. London:Academic press,

Laver,J. (1974) Communitive Functions of Phatic Communion. in A.Kendon, R.Harris & M.Key (eds.) (1975)

"Organization of behavior in face-to-face interaction", World Anthoropology 9,The Hague:Mouton, pp.215-238.

Laver,J. (1981) Linguistic Routines and Politeness in Greeting and Parting. in Coulmas ed. (1981).

Lueger,H.-H. (1983) Some Aspects of Ritual Communication. Journal of Pragmatics 7:695-711.